

# 電腦世界

Topik

熱論理ゲートの概念モデル

電子計算組織計算研究会

機関誌第3号

# 目次

P2.熱で動くコンピューターが誕生するかも?!  
熱論理ゲートの概念モデル

熱で動くコンピューターが誕生するかも?!

## 熱論理ゲートの概念モデル

---

### 論理ゲートとは何か？その役割と仕組み

コンピューターの世界において、論理ゲートは情報処理の基本単位として極めて重要な役割を担っています。論理ゲートは、入力された情報に基づいて特定の論理演算を実行し、

その結果を出力するデジタル回路の一部です。これらは、コンピューターがデータを計算したり、意思決定を行ったりする際に使用される基本的な構成要素であり、コンピューター内部での動作を支える基盤となっています。

### 論理ゲートの役割

コンピューターは、0 と 1 の二進数を用いて情報を処理します。論理ゲートは、この二進数データに対して論理演算（AND、OR、NOT など）を適用することで、複雑な計算やデータ操作を可能にします。これらの論理演算は、最終的に加算、減算、乗算などの算術演算や、条件判断といった高度な処理に繋がります。

- データ比較  
特定の条件を満たすかどうかを判定する際に使用。
- 制御フロー  
プログラム内の条件分岐やループ制御に活用。
- 演算処理  
算術論理ユニット（ALU）での計算を実現。

## 論理ゲートの仕組み

論理ゲートは、トランジスタなどの電子部品を用いて実装されるデジタル回路です。それぞれの論理ゲートには特定の論理演算ルールが組み込まれており、入力信号の状態に応じて出力信号が決定されます。代表的な論理ゲートの種類とその動作は以下の通りです：

### AND ゲート

- 入力がすべて 1 のときにのみ 1 を出力。それ以外は 0 を出力。

入力 A	入力 B	出力
0	0	0
0	1	0
1	0	0
1	1	1

### OR ゲート

- 入力のいずれかが 1 であれば 1 を出力。両方とも 0 のときのみ 0 を出力。

### NOT ゲート

- 入力を反転させる（1 を 0 に、0 を 1 にする）。

これらの基本ゲートを組み合わせることで、より複雑な演算を実現する「複合ゲート」が作られます。これらは、プロセッサやメモリなどの主要なハードウェアコンポーネントに組み込まれ、デジタルデータ処理の中核を成しています。

## 熱論理ゲートとは？その可能性と挑戦

自然界において、エネルギーの輸送は主に電気伝導と熱伝導によって行われています。

近年の科学技術の発展によって、電気伝導の制御を可能にした電子トランジスタの発明は、情報処理や通信技術の大躍進をもたらし、現代社会の基盤を築きました。一方、熱伝導を制御する技術はまだ限定的であり、これまでに多くの研究や試みがなされてきたものの、実用的なデバイスは十分に実現されていません。

しかし、熱伝導を用いた熱トランジスタには「宇宙分野における応用」「極限状態における応用」ができる可能性を秘めていると考えています。

例えば、電気伝導を用いた論理ゲートつまり一般的なコンピュータは、限られたエネルギーしかない環境下や、宇宙線などの影響を受ける環境下では非常に不利である一方、熱論理ゲートは、熱のキャリアであるフォノン（格子振動）を活用し、情報の処理を行うデバイスであるため、限られたエネルギーしかない極限環境に適応可能で、宇宙線等の影響を受けづらいと考えられます。

従来の電子論理ゲートが電荷キャリア（電子）を利用していたのに対し、熱論理ゲートは非線形格子の温度依存性を利用してフォノンを制御する点で非常にユニークです。

具体的には、

- 温度依存性のパワースペクトル

非線形格子の温度特性に基づいて、フォノンの流れを調整します。これにより、特定の条件下でフォノンが情報キャリアとして機能します。この仕組みは、従来の電子を用いた情報伝達手法と異なり、熱エネルギーを有効活用することで、廃熱を利用した情報処理を可能にします。

- ナノスケールでの適用可能性

ナノ材料の開発により、熱論理ゲートの設計が現実味を帯びています。ナノスケールでの制御が可能となることで、従来の電子デバイスと比較して、より小型でエネルギー効率の高いデバイスが期待されます。この特性は、デバイスの小型化が求められる分野において重要な役割を果たします。

- エネルギー消費の削減

電子ではなく熱を情報キャリアとして使用するため、低エネルギーで動作する可能性があります。これにより、従来の電子デバイスと比較してエネルギー効率を大幅に向上させることが可能となり、持続可能なエネルギー利用に寄与します。

- 宇宙線・放射線への耐性

**1. フォノンは電荷を持たない**

放射線や宇宙線による荷電粒子の衝突が、フォノンに直接的な影響を与えることは少ないため、動作が安定しやすいと考えられます。

**2. 非電子的なエネルギー伝達**

フォノンを情報キャリアとすることで、電場の乱れや電流の遮断といった放射線の影響を回避できます。これにより、宇宙環境でも信頼性の高い動作が期待されます。

**3. 耐放射線材料との組み合わせ**

放射線に強い材料を用いてフォノンを効果的に伝達させる設計が可能であり、宇宙空間や放射線の多い環境での利用が促進されます。

これらの利点や特徴が挙げられます。



## 熱論理ゲートの未来

熱論理ゲートの実現は、情報処理技術に革新をもたらす可能性を秘めています。特に、ナノスケールの材料科学や量子技術の進展により、これらのデバイスが現実的な選択肢となりつつあります。また、熱エネルギーは廃熱として捨てられることが多いため、それを有効利用することで持続可能な技術の発展にも寄与するでしょう。

今後の課題としては、熱伝導を精密に制御する方法の確立や、実験的なデバイスの性能向上が挙げられます。これらが克服されれば、熱論理ゲートは次世代の情報処理技術として大きな役割を果たすでしょう。

## 熱論理ゲートの概念

熱論理ゲートには、熱源が必要で、これによりいくつかの点の温度を維持します。非線形デバイスとして熱トランジスタを使用し、1次元の Frenkel-Kontorova (FK) 格子モデルを用いました。この格子は、非線形の特徴を持ち、温度依存性により異なる振動スペクトルを持つことで、熱流の制御を可能にします。

### 動作機構と構成

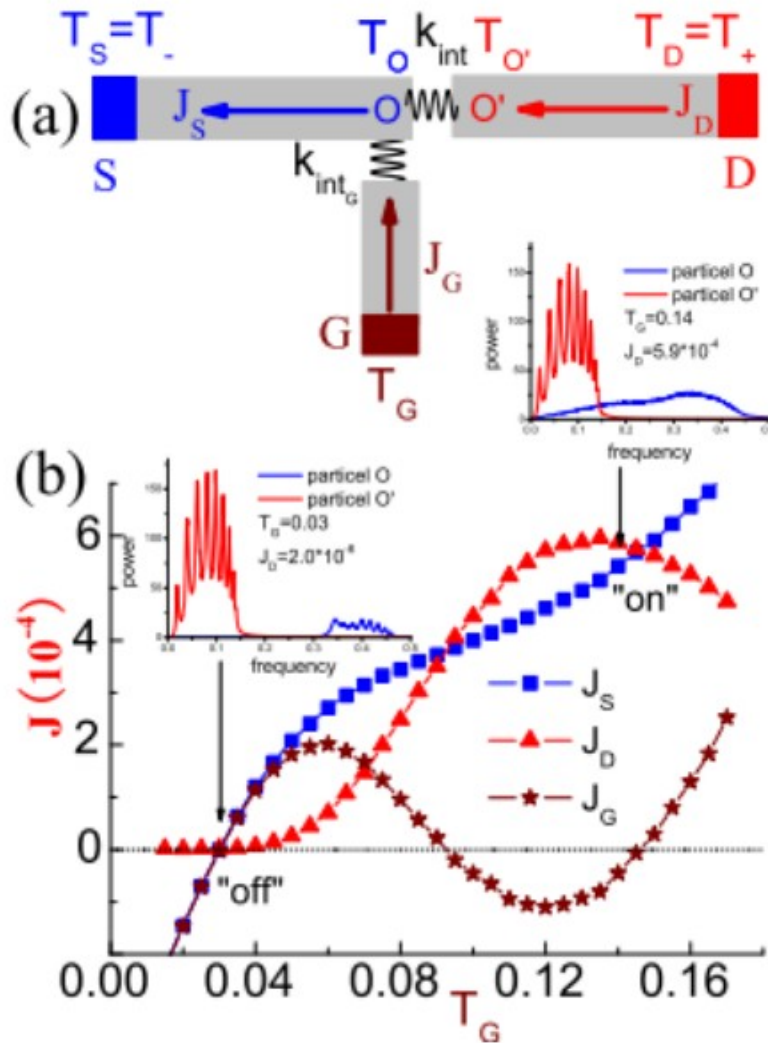
- 負微分熱抵抗 (NDTR) NDTR は熱トランジスタの基本原則であり、温度差が減少しても熱流が増加する現象です。FK 格子の振動スペクトルの温度依存性を利用し、効率的な熱流制御を実現しました。
- 熱信号リピータ 入力信号を標準化するための基本的な装置で、非線形特性を利用して理想的なリピータ動作を実現しました。
- NOT ゲート 入力を反転させる装置で、負の応答を利用して実現しました。温度分割器を組み合わせることで、出力信号をさらに標準化しました。
- AND/OR ゲート 2つの入力を持つ装置で、それぞれの条件に基づき出力を制御します。熱信号リピータを組み合わせることで、論理演算を可能にしました。

• (a) 熱トランジスタの構成

熱トランジスタは、2つの非線形セグメント D（ドレイン）と S（ソース）、および制御セグメント G（ゲート）で構成されています。D と S は、それぞれ高温（ $T_+$ ）と低温（ $T_-$ ）に接続されています。制御セグメント G は、入力信号の温度 TGT\_GTG に接続されています。各セグメントは Frenkel-Kontorova（FK）格子でモデル化されています。

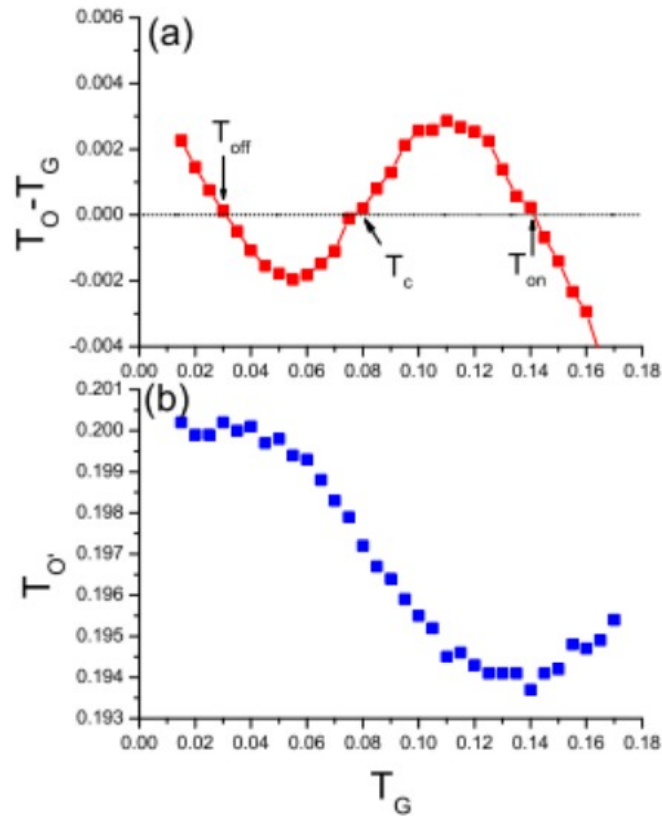
• (b) 温度 TGT\_GTG の変化による熱流の挙動

グラフは、各セグメント（D、S、G）を通る熱流  $J_D, J_S, J_G$  をプロットしたものです。温度 TGT\_GTG が変化する際、負微分熱抵抗（NDTR）効果により、広範な領域で  $J_S$  と  $J_D$  が増加します。





- (a)  $T_O - T_G$  vs.  $T_G$  の中央領域では、入力温度  $T_G$  の変化に対し、出力温度  $T_O$  がより大きく変化します（「スーパー応答」）。
- (b)  $T_O$  vs.  $T_G$  が増加すると、出力温度  $T_O$  は逆に減少します（負の応答）。



#### 数式1: FK格子モデルのハミルトニアン

$$H_{FK} = \sum_i \left[ \frac{1}{2} \dot{x}_i^2 + \frac{1}{2} k (x_i - x_{i-1})^2 + U_i(x_i) \right],$$

ここで、

- $k$ : バネ定数
- $U_i(x) = \frac{1}{(2\pi)^2} (1 - \cos(2\pi x))$ : 外部ポテンシャル

このハミルトニアンは、外部ポテンシャルを受ける調和振動子の連鎖を記述します。

図 3: 熱リピータの構造と性能

- (a) 構造 熱リピータは複数の熱トランジスタを直列に接続して構成されます。
- (b) 性能 入力信号が標準化され、最終的な出力が理想的なリピータに近づきます。

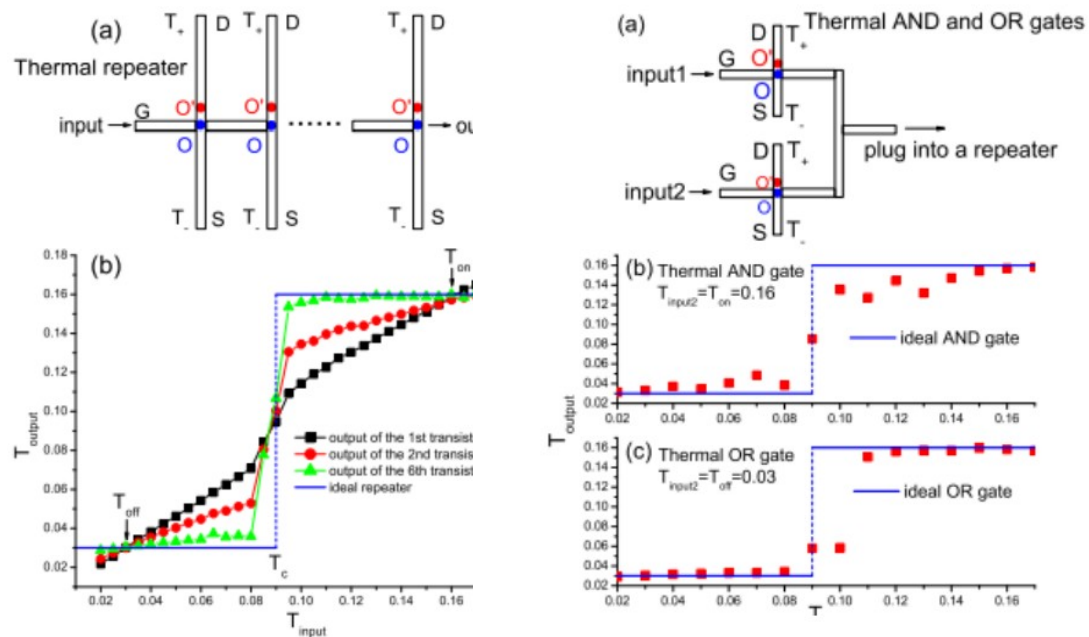


図 4: 熱 AND および OR ゲートの構造と性能

- (a) 構造 2つの入力をリピータで標準化し、同じリピータに接続します。
- (b) 熱 AND ゲートの特性 片方の入力が「オン」（高温）の場合、出力が他方の入力に追従します。
- (c) 熱 OR ゲートの特性 片方の入力が「オフ」（低温）の場合、出力が他方の入力に追従します。

以上が熱論理ゲートの概念モデルです。

熱論理ゲートは、従来の電子デバイスにはない特性を持ち、エネルギー効率の向上や宇宙環境での高い耐性を備えた新しい情報処理技術として注目されています。特に、ナノスケールでの実現可能性やフォノンを用いたエネルギー伝達の安定性は、これからの科学技術に新たな可能性をもたらします。さらに、宇宙開発や持続可能なエネルギー利用といった最前線の課題に対しても、熱論理ゲートは有力な解決策となるでしょう。今後の研究と技術の進展により、この革新的な技術が実用化される日が訪れることを期待しています。

引用元：Thermal Logic Gates: Computation with Phonons

arXiv:0709.0032

シンガポール国立大学 物理学科、計算科学・工学センター、統合科学・工学大学院

## 発行理念

部での活動を通して得たたくさんの知識のもっとたくさんの人に知ってほしい。

そしてソフトウェアやハードウェアをはじめとする活動で扱っている様々な分野に興味を持つきっかけとなってほしい。

またその分野を知っている人でも、もっと奥に踏み込める手がかりとなってほしい。

様々な分野の記事を掲載するのは多数の分野の知識を得て初めて見えてくるものがあるからである。

そのような理念のもと、この機関誌「電腦世界」を発行している。

---

## 電腦世界

第3号

発行	電子計算組織計算研究会
発行日	2025 年 1 月 17 日
連絡先	edpsmails@gmail.com
Twitter	@OECU_EDPS

---



bj.desc)

```
perf(Pc=1.1, eps=2.3, MR=1.45):  
    c, Cstar, Tc, MW, gamma = ceaObj.get_ivacCstrTc_ChmMWgamma(  
        Pc, eps, MR, IspVac, Cstar, Tc, MW, gamma))  
    IspVac(sec) Cstar'
```

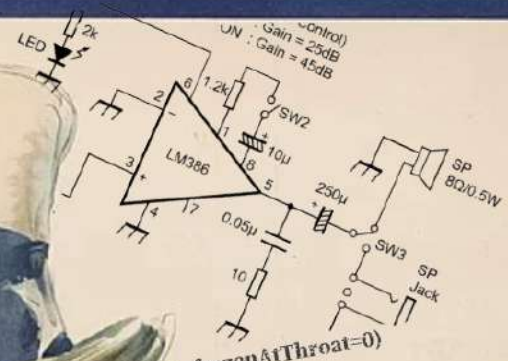
```
Pc(MPa) AreaRatio O/F IspVac(sec) Cstar'  
in np.arange(1, 2, 0.1):  
    w_perf(Pc=1.1, eps=2.3, MR=MR)
```

```
load = 30.0 # [kg]  
= 350.0 # [kg]  
= 800.0 # [kg]  
= 0.90 # Isp efficiency
```

```
= Wstg + Wpropellant + Wpayload  
al = Winit - Wpropellant
```

```
show_deltaV(Pc=1.1, eps=2.3, MR=1.45):  
    IspVacTheoretical = ceaObj.get_Isp(Pc=Pc,  
    IspVacMeasured = effIsp * IspVacTheoretical  
    IspSL, mode = ceaObj.estimate_Ambient_  
    IspSLMeasured = effIsp * IspSL  
    deltaV = 9.80665 * IspVacMeasured * np.  
    print('%.1f %.1f %.7f %.1f %.8f  
    # print(mode)
```

```
print()  
print(Pc(MPa) AreaRatio O/F IspVac(s) Isp  
for eps in np.arange(1, 4, 0.5):  
    show_deltaV(Pc=1.1, eps=eps)
```



0, frozenAtThroat=0)  
IspTheoretical, IspVacMeasured, IspSL, IspSLMeasured



# I WANT YOU FOR EDPS

Room 201, Building O, Neyagawa Campus